

プラス1

～いつもの支援を一工夫～

岐阜県立東濃特別支援学校
地域支援センター通信
No. 62 (R5年11月号)

こんにちは！東濃特別支援学校 地域支援センターです。

地域支援センター通信『プラス1』は、センター的機能充実事業の一環として発行しています。先生方の実践に役立つ情報を提供していきます。どうぞよろしくお願いいたします。

バックナンバーはホームページでご覧いただけます。

夏休み期間中に、センター的機能公開講座と地域連携支援会議という行事を実施しました。今回は上記を取り上げ、研修のポイントや連携する意義をお伝えしたいと思います。

○センター的機能公開講座

公開講座とは、特別支援学校が担っている任務（①小・中学校等の教員への支援機能、②特別支援教育等に関する相談・情報提供機能、③障害のある幼児児童生徒への指導・支援機能、④福祉、医療、労働等の関係機関等との連絡・調整、⑤小・中学校等の教員に対する研修協力機能、⑥障害のある幼児児童生徒への施設設備などの提供機能）の一部であり、地域の幼稚園や保育園から小学校、中学校に研修会の参加を募っています。

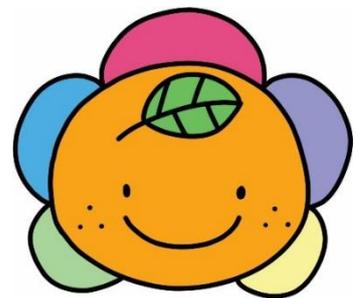
1回目の公開講座は門真一郎先生を迎え、「合理的配慮としてのコミュニケーション支援」として開催しました。

研修のポイントとして、「人と関わる場（教育現場・福祉支援の場）では、必ずコミュニケーションが必要となる。そのコミュニケーションが困難であるのが自閉スペクトラム障害であり、別のコミュニケーション方法を提供することが有効である」というものです。合理的配慮のひとつとしてコミュニケーションの視覚的支援として「PECS®」を紹介していただきました。

参加者からは、「視覚支援の重要性を改めて実感した。子供達の自発的な表出を引き出せるようにしていきたい」、「絵カードを使うことはありましたが、一方的にしてほしいことを伝えることに使うことが多かったです。今後は、意思表示や文作りに生かしたいと思いました」

「改めて、自発的な表出について考える機会となりました」という感想が聞かれました。

2回目の公開講座は特別支援教育ネット代表の小栗正幸先生を迎え、「支援・指導の難しい子を支える魔法の言葉」として開催しました。研修のポイントとして、「支援者の思いが空回りし、支援対象者に届かないとトラブルに発展する。トラブルの本質を知り、対処する力を付ける」ことが挙げられます。



2回目の参加者からは、「愛着障害の子どもへの対応がとても参考になりました。これから信頼関係を築いていくためにも、子どもを認めていく言葉がけを心掛けていきたいです」、「子どもの見方について、どのような行動を観察することが大切か、非常に勉強になりました」という感想がありました。

このように、公開講座は専門家から特別支援教育の基本や、定番の支援方法だけでなく、新しい知識・考えを知ったり取り入れたりするきっかけになると思います。これからも定期的に公開講座を開いていきますので、ぜひご参加ください。

○地域連携支援会議

地域連携支援会議は、小学部1・4年生、中学部の1年生、就労について検討していく高等部2年生を対象に、子どもたちを支援して下さる関係機関の方々に集まっていただき、「顔の見える関係づくり」を目的として実施しています。

お子様の状況や保護者のニーズの変化によって必要な支援も変化するので、少し先を見通して、どんな準備が必要か、今何ができるのかを関係機関の方々と一緒に考えています。参加者のアンケートからは、「話せる場所、相談できる人がいることが分かり、心強かった」「将来のことを不安に思っていたが、関係機関の方からいつでも相談に来てくださいと言ってもらえて、心強く感じた」等の感想がみられました。

今後は、各関係機関で支援してもらえる専門的内容を具体例として提示させていただき、保護者の方が質問内容を考えやすくしたり、関係機関の方々にそれぞれの専門的内容から考えられる支援を話していただいたりすることで、より有意義な会議にしていきたいと考えています。



学習面や行動面で気になる幼児、児童、生徒についての相談や訪問支援、職員研修のご依頼はこちらまで

岐阜県立東濃特別支援学校 地域支援センター

山下智弘

0572-55-4821 p42750@gifu-net.ed.jp



プラス1

～いつもの支援を一工夫～

岐阜県立東濃特別支援学校
地域支援センター通信
No. 59 (R5. 2月号)



進路選択と『ライフスキル』

変化の激しい時代といわれる現代において、児童、生徒が進路を実現するために必要な知識やスキルは、今後も大きく変化していくと考えられます。こうした中で、子どもたちが「生きる力」を身につけ、それぞれが直面するであろう課題に対し、柔軟にかつたくましく対応し、社会人として自立していくことができるようにする教育が求められています。

また、個人のスキルとしての『ライフスキル』について、WHO（世界保健機関）では、「日常的に起こる様々な問題や要求に対して、より建設的かつ効果的に対処するためのスキル（1997年）」として位置づけており、変化の激しい時代だからこそ、個人に合った『ライフスキル』の獲得が必要だと考えられます。

障がいのある児童生徒にとって、個々の特性にあった『ライフスキル』を身につけていけば、その後の社会生活を大きな混乱なく、送っていただけるのではないのでしょうか。

発達障がいがある子のライフスキル

1 身だしなみ

髪型や服装を整えること。相手、場面、季節に応じて調整する力。

2 健康管理

健康を保つスキル。体調の変化を自覚する力。

3 住まい

掃除やごみ捨てなど、住まいの管理をする力。
(一人暮らしでは公共料金の支払いも含む)

4 金銭管理

お金を計画的に使う力。無駄遣いや借金をせず、買い物する力。

5 進路選択

先の見通しを持って行動するスキル。自分に合った道を選択する力。

6 外出

予定した時間や行先、費用などを守って行動する力。

7 対人関係

できる範囲でマナーやルールを身につけ、人間関係で大きなトラブルを起こさないスキル。

8 余暇

休み時間や休日をリラックスして快適に過ごす力。

9 法的な問題

不用意な法的トラブルを起こさない力。

10 地域参加

家庭や学校だけでなく、他にも参加できる場所を持つ。



進路先の決定は、人生の大きな選択の1つ！

進路先の決定において、支援者が心がけたいことには、以下のようなことがあります。

1 子どもの話を聞く

まずは子どもの話を聞くことが大切。突拍子もないことを言っても、否定せず、本人が理解できることと、そうでないことを把握する。

2 選択の仕方を確認する

決定のプロセス、判断基準、スケジュールなどを本人と確認する。

3 見通しを立てる

本人の話や、学校での様子、発達障害の状態などこれまでの様子を参考に見通しを立てる。

4 希望をまとめていく

保護者の意見なども参考に、子どもにとって最適な見通しを示していく。
その子にとって、分かりやすいことが大切。

5 最後は本人が決断する

現実的に、子どもが適応しやすい進路をいくつか選び、その中から、子ども本人が最終的な決断をする。

本の紹介

今回の参考文献：15歳までにはじめたい

発達障害の子のライフスキル・トレーニング 監修 梅永雄二

障害のある児童、生徒の多くは集団行動が苦手です。そのため、ソーシャルスキル（社会生活で必要となる技能）の不足やかたよりは注目されやすくなっており、トレーニングやサポートもよく行われています。

対人関係の支援を受けることは重要ですが、実は生活面『ライフスキル』のサポートも同じように重要です。

そのためのヒントが書かれています。

プラス1

～いつもの支援を一工夫～

岐阜県立東濃特別支援学校

地域支援センター通信

No. 58 (R4. 10月号)



研修を開催しました。

7月29日（金）に、NPO 法人カケルとミチルの岡琢哉先生に『周囲との関係性構築が難しい生徒を支援するために必要な視点』というテーマでお話ししていただきました。

オンラインでの開催になりましたが、多くの先生方にご参加いただき、ありがとうございました。短い時間ではありましたが、医学的な視点から多くのことをお話しいただき、とてもよい機会になりました。今回の学びを今後の児童生徒の指導・支援や保護者との連携に生かしていきたいと思います。また今回は東濃地域のさまざまな職種の方々と一緒に学ぶことができ、違った視点からも学ぶことができました。貴重なお話をしてくださった岡先生に感謝申し上げます。研修のアンケート結果（抜粋）を紹介したいと思います。



・マルトリートメント（児童虐待）について、社会—子ども—養育者の3つを繋ぐ輪の中で考えることが大切であると学んだ。

・子どもたちだけでなく、保護者への支援（保護者の心の状態や社会との繋がり、支援を求めることができる人が周りにいるか）も視点の一つとして意識することが大切だと感じました。



・マルトリートメントを個人や家族の問題に帰するのではなく、「社会」がどのように関わるかが重要である。問題が起きた時だけ「社会」と繋がるのではなく、問題が起きていない時も継続して「社会」と繋がりを持つことの必要性を理解した。

合理的配慮

～当校で実際に行っている支援を紹介します！～



視覚優位

特性

- ・耳から聞こえる言葉だけで理解することが苦手
- ・絵や写真など、視覚的に提示されたものからの理解が得意



タイムタイマー
「あと何分」のイメージが難しい子

支援方法

- ・言葉だけでなく視覚的に提示する
- ・指示や要求等のコミュニケーションを絵カードや写真をつかっておこなう
- ・ICT の活用

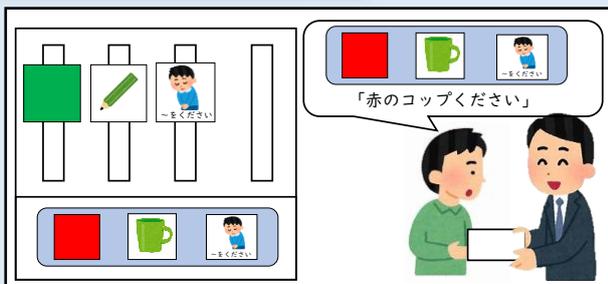


「何を」「あと何回」が視覚的に分かる

- ・写真付きの流れ表（視覚支援）
- ・漢字が読めない生徒のためのルビ



言葉でコミュニケーションを取ることが難しい子
→絵カードを職員に渡すことで、iPadが使用できる。



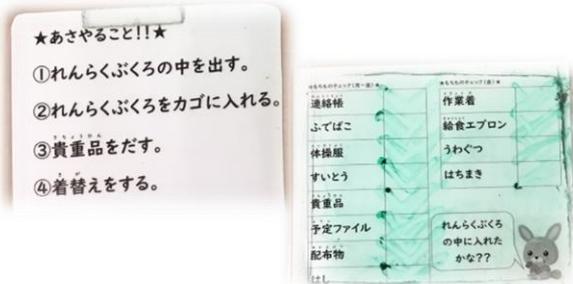
PECS®

絵カードを手渡しすることで、コミュニケーションをとる方法。段階を踏んで、絵カードで三語文程度の文章を作れるようにする。

対象

- ・発語がない子や、自発的な発語がない子
- ・耳から聞こえる言葉だけでの理解が苦手

忘れ物が多い、整理整頓が苦手



朝の片付けや帰りの準備を一人でするための流れ表、チェックリスト

感覚過敏



タブレット等の光がまぶしい
→サングラス

過集中防止タイマー

大きな音、特定の音が苦手
→イヤーマフや耳栓

プラス1

～いつもの支援を一工夫～

岐阜県立東濃特別支援学校
地域支援センター通信
No. 56 (R4. 5月号)

こんにちは！東濃特別支援学校 地域支援センターです。

新学期が始まりました。

今年度もセンター的機能充実事業の一環として地域支援センター通信『プラス1』を発行していきます。先生方の実践に役立つ情報を提供していきます。どうぞよろしくお願いいたします。

バックナンバーはホームページでご覧いただけます。



アイデア教材のご紹介 ～モグラたたきゲーム～

当校では、職員が日頃、児童生徒への支援のために教材・教具を創意工夫して制作しています。そんなアイデア教材を紹介します。今回、ご紹介する教材は、昨年度の当校「校内アイデア教材展」で大賞をとった教材です。この他の教材についても、近々ホームページで紹介させていただきます。



○対象児童・生徒

- ・目標物に視線が向かない子。
- ・集中力の持続に課題がみられる子。

○教材の目的

- ・目と手の協応動作を養う。
- ・最後まで集中して取り組む。

○材料

- ・段ボール(土台)
- ・空のペットボトル(モグラとして使用。児童生徒の好きなキャラクターにする)
- ・おもちゃのトンカチ

○作り方

- ・段ボールを三角柱に組み立て、側面にモグラの出る穴をあける。
- ・穴には覗き防止の画用紙を付ける。
- ・別の側面にモグラを出し入れするための大きめの穴をあける。

○児童の様子

- ・「トンカチでたたく」ことが楽しみで、教材に注目しにくい児童も穴から出てくるモグラを探す姿が見られた。

○作成者より

穴の数によって難易度が変わるので、子どもたちの様子に合わせていろいろアレンジして楽しんだり、時間を決めていくつモグラをたたけるか挑戦して楽しんだりすると良いです。



トピックス

新学期が始まり、児童生徒の個別の教育支援計画、個別の指導計画を確認しているところか
と思います。今回は、個別の教育支援計画や指導計画をどのように活用すると良いのか紹介し
ます。



◆個別の教育支援計画とは

『子どもの今の状況がひと目で分かり、どこを目標として支援していくのかを具体的に示したもの』

…障害のある児童生徒の一人一人のニーズを正確に把握し、教育の視点から適切に対応していくという考えの下、長
期的な視点で乳幼児期から学校卒業後までを通じて一貫して的確な教育的支援を行うことを目的としたもの。

(文部科学省 HP より)

また、この支援計画は、学校や保護者だけでなく、「福祉」「医療」「労働」等が連携して児童生徒を支援していくため
のものでもあります。この教育支援計画があることで、長期的に一貫した支援を行っていくことができます。「地域連携
支援会議」という場を設定して、個別の教育支援計画を関係機関と保護者、担任と確認し、共通理解のもとで必要な
支援を行っていくために活用されています。

◆一人一人のニーズとは

…本人や保護者が課題と感じていることや、願う姿。

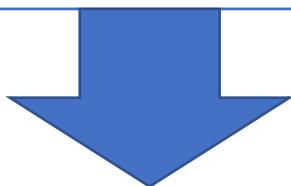
(例:周りの人に自分から助けを求められるようになってほしい。

最低限の身辺自立ができるようになってほしい。など)



◆個別の指導計画とは

…個別の教育支援計画をもとに、教育の側面から児童生徒のニーズに合わせた支援、指導について考え、作成しま
す。小中高等学校のそれぞれの教育課程を修了したときに願う姿や、学習上で目標とする姿を記入したもので、本人
や保護者の願いと、学校の願いを合わせた指導計画となります。定期的に指導の成果を評価しながら、一人一人に適
切な支援や指導をする方法を見直します。



◆個別の教育支援計画の活用方法

- ①入学前の移行支援での活用
- ②個別の指導計画作成時
- ③地域連携支援会議

◆個別の指導計画の活用方法

- ①年度末の引継ぎでの活用
- ②毎日の授業での指導・支援
- ③保護者との連携に活用

個別の教育支援計画がベースとなり、一人一人のニーズを具体化したも
のが個別の指導計画となります。どちらも『本人や保護者の願い(ニー
ズ)』を大切にしながら作成を進めていきます。

【気を付けたいポイント①】

教師側の願いと本人・保護者の願いに行き違いが起こらないよう、個別
懇談等での丁寧な聞き取りをしていきたいですね。長期目標を達成するた
めに学校と家庭でできることは何か、支援の方法を一緒に考えられると良
いですね。そのためにも、保護者の思いや願いに寄り添い、連携した支援
を目指していきましょう。

【気を付けたいポイント②】

個別の目標を設定したのになかなか達成できない…といったことはあり
ませんか?達成できない理由は何か、課題の難易度や量、支援は適切な
のか分析をしましょう。初めてかかわる教師や初めての活動ではまた様子
も異なります。「去年はできていたのに、どうしてできないの?」と思うこと
もあると思いますが、子どもとじっくりかかわりながら、改善策を考えてい
きましょう。

プラス1

～いつもの支援を一工夫～



岐阜県立東濃特別支援学校
地域支援センター通信
No. 55 (R4. 3月号)

できていること、得意、好きに着目した支援

一年のまとめの時期、子どもたちの支援を来年度に引き継ぐ大切な時期となりました。個別懇談では、個別の支援計画等をもとに、今年一年でできるようになったこと、子どもさんの現在の状態、有効な支援方法等を、分かりやすく伝えるようにしました。

支援を引き継ぐときには、「支援をする先生が変わっても大丈夫、次の先生もできる支援の形」にしておきたいですね。そんな支援を考えると、「できていることを活用した支援」「得意なこと、好きなことを活かした支援」であることが、次につながりやすい支援のコツの一つになるのではないかと思います。例えば、よく使われていると思いますが、「ヘルプカード」。「言葉で話すのは苦手だけど、イラストや文字のカードの違いを認識することができる」の「できる」を活用した支援です。困ったときに、先生に聞くことができる安心感も大切にしたいです。

① とつぜんですが

この二つの円の
どこに目が行きますか？



これは、ゲシュタルト心理学で有名な「欠けた円」というものです。人間の目は、欠けている円、その中でも特に欠けた部分に目が行きます。「認知不協和」という習性で、これは、人を見るときにも働いてしまうそうです。「欠けているところ」に目が行ってしまうということです。

支援のコツの一つに、「スモールステップで教える」ことが挙げられます。スモールステップの第一弾は「できているところを認める」だと思います。人は、「欠けているところ」→「できていないところ」に注目してしまうので、まずは、「意識して」「できているところ」に目を向ける癖をつける練習をし、その習慣をつけていきたいですね。

② 教材紹介 ～スモールステップ～

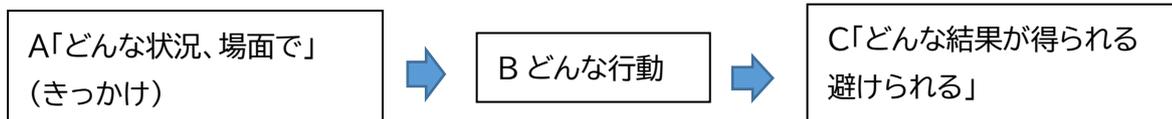


箸の使い方の苦手な子に、スモールステップ。

- ① まずはできているところ「一本の箸を持つことができる」ところからスタート。
- ② 手首を大人が保持して、三本の指で箸を動かして玉を壁に当てる。
- ③ 10個できたら終わり(終わりが分かる)。
- ④ 三本で動かすのが上手になったら、もう一本を足して、「はさむ」練習に移る。

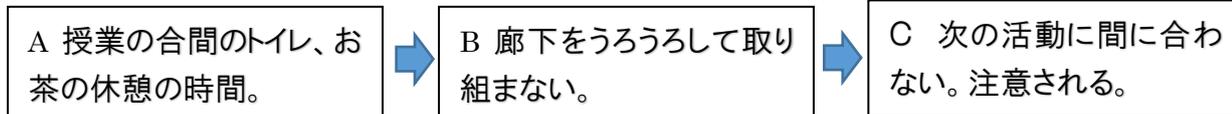
③ ABC 分析(応用行動分析学)の視点から

子どもの気になる、困った行動について



ABC 分析の視点から整理し、ABC それぞれへの対応を変えることによって、「気になる困った行動の意味をより適切な行動によって果たせるようにすることで、気になる、困った行動を起こす必要がなくなる。すなわち、代わりとなる適切な行動を育むこと」(「保育士のための気になる行動から読み解く子ども支援ガイド」学苑社より抜粋)を目指します。

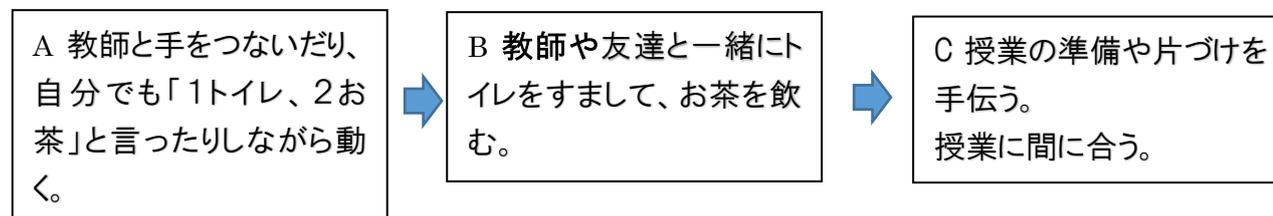
事例)「授業の合間のトイレ、お茶の休憩の時間に廊下をうろうろして遅くなり、次の活動に間に合わない。」という T さんについて、ABC に分けると、以下のようになります。



教師は、C「次の活動に間に合わない」→「注意する」という対応を取っていましたが、本児にとっては「C 声をかけられる」ということによって、「注目を得る」という結果を得ているのではないかと考えました。(結果として得ているものは、「注目の獲得」「嫌悪自体からの逃避」「物や活動の獲得」「感覚や刺激の獲得」があります。)そこで、本児の好きな、「準備、片づけのお手伝いができる」こと、「みんなと一緒に活動することが好き」なことをヒントに ABC それぞれへの対応を考えました。

	A への支援	B への支援	C への支援
考えられる支援。(できていること、好きなこと、得意なこと、分かることをヒントに)	<ul style="list-style-type: none"> ・「1トイレ、2お茶、3お手伝い」と見通しがもてるようにイラストで示す。 ・(T さんが)「一緒にトイレに行きたいです」と言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・廊下で遊んでいるときには声はかけない。 ・トイレに行けているときに、声をかけたり、関わったりする。 ・教師と一緒にトイレに行く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・終わった子から、お手伝いを頼む。 ・お手伝いをしてくれたことに感謝する。 ・早く準備ができた子から、おまけの手遊び等の活動を行う。

対応を変えたことによって、こんな行動になりました、



対応を考えたときに有効だったことは、Tさんが、積極的に活動できている場面は、「どんな場面で、どんな対応で、どんな結果がえられているのか」に注目することでした。「お手伝いが好き」「人と関わるのが好き」「係りの仕事には積極的に取り組んでいる」「認めてもらうことを喜んでいる。」という T さんの好きなこと、得意なことを ABC の対応にいれ、実践すると、「お手伝いをする」ことを楽しみに、授業の始まりに間に合うことが増えました。ABC それぞれへの対応を考えることで、支援の選択肢が増えました。

ABC分析については、分かりやすい本もたくさん出ています。今回はこちらの本を参考にしました。具体的な事例がたくさんで分かりやすいです。
「保育士のための気になる行動から読み解く子ども支援ガイド」学苑社



～最後に～

一年間、「プラス1」をお読みいただきありがとうございました。今後も ICT の活用、オンラインの普及、コロナ禍による行事等の変更中止等、目まぐるしい変化の中ですが、子どもたちが安心して生活できる「支援教育」に向けて、手を取り合っていけるような情報をお届けし、よりよい「プラス1」にしていきたいと思っております。アンケートのご協力をよろしくお願いいたします。

プラス1

～いつもの支援を一工夫～



岐阜県立東濃特別支援学校
地域支援センター通信
No. 54 (R4. 1月号)



「高等部卒業後の進路について」

知的障がい者の就労について、職場での人間関係が重要視されており、周囲の方々の理解、支援を得るために円滑なコミュニケーションが必要です。当校高等部では、作業学習や職業の学習を通して、雇用や就労を考える機会の一つとしています。

保護者の方には、進路選択・進路決定において、必要な手続き等を知っていただき、進路への関心や理解を深めてもらい、高等部で身に付けるべき力、実践すべきことについて、共通理解を図るようにしています。

当校高等部（知的障がいの教育課程）卒業後は以下のような進路先が一般的です。

○一般企業への就労

企業の現場実習を重ねて、ハローワークを介して就労が決定していきます。“障がい者雇用”として就労していきます。

○就労移行支援事業所

企業への就労を希望する方や、技術を習得し、在宅等で就労・起業を希望する方を対象に、事業所内や企業での作業・実習・技術を身に付ける学習支援に加え、職場開拓支援、就労後の職場定着支援等を行う福祉サービスで、利用期間は概ね2年です。事業所から給料や工賃が支払われることは基本的にありません。

○就労継続支援 A 型（雇用型）

通常の事業所に雇用されることが困難な方に対し、雇用契約に基づく就労機会の提供、知識及び能力向上のために必要な訓練等を行うサービスで、このサービスを通じて一般就労に必要な知識や能力が高まった方は、最終的には一般就労への移行を目指します。

○就労継続支援 B 型（非雇用型）

一般企業等での就労が困難な方に働く場を提供するとともに、知識及び能力のために必要な訓練を行います。就労機会と生産活動を通じて、就労に必要な知識や能力を身に付けた人は、就労継続支援 A 型や一般就労へのステップアップを目指します。

○生活介護事業所

常に介護を必要とする人に、昼間、入浴・排せつ・食事等の日常生活の支援を行うとともに、創作的活動又は生産活動の機会の提供、身体機能又は生活能力の向上のために必要な支援を行います。

○進学

職業能力開発校等への進学があります。



《 土岐商業高等学校と交流学习を行いました！ 》

高等部3年生では、土岐商業高等学校と交流学习を行いました。今年度は、コロナウィルス感染症対策のため直接の交流学习はできず、オンラインでの交流学习となりました。

今回の交流学习では、高等部の各作業班のポスターを一緒に作成するという活動を行いました。自分たちが普段作業学習で頑張っていることやおすすめの商品についてPRをし、それをもとに土岐商業高校の生徒の皆さんにポスターの案を作成してもらいました。何度も試行錯誤を繰り返しながら、各班素敵なポスターが完成しました。

同じ高校生同士の交流ということで、さまざまな意見もあがり、とても有意義な時間になりました。



本の紹介



息子が高等部を卒業して、はや10年が経ちました。高等部で学んだことは、現在の彼にとっても、親にとっても、生きていくうえで原点になっています。ただ、社会の中では、息子の心を置き去りに、うまくいかないまま過ぎていくことも多く、また息子に対して親としてどんな対応をしたらよいか疑問に思うことがあります。他人だったらなおさらだと思います。そんな時、もう一度障害について勉強をしようし理解を深められたらと思い、「知ってほしい・知っておきたい」を手に入れました。

学校にいられるのは、生涯のうちのほんの一時です。卒業後の未来の姿を伝えていけられたらいいですね！

—高等部卒業生保護者談—



プラス1

～いつもの支援を一工夫～



岐阜県立東濃特別支援学校
地域支援センター通信
No. 53 (R3. 11月号)

つながりの中で支援！地域連携支援会議

地域連携支援会議とは・・・当校の児童生徒、保護者、居住地である市の教育委員会や多治見市・瑞浪市・土岐市の教育委員会、子ども支援課や、福祉課、相談支援事業所の担当者が一堂に会し、「顔の見える関係づくり」を行います。「個別の教育支援計画」をもとに、児童生徒がどのような支援を必要としているか、本人、保護者とともに意見交流や情報交換をします。主役である児童生徒の今後の支援をよりよいものにし、夢と希望のある生活のために、今年度も、7月26日、28日に地域連携支援会議を開催しました。

今年度の会議アンケートの抜粋です。地域とのつながりの中で支援していくことの大切さを感じていただけたら嬉しいです。

<保護者より>

- 地域のいろいろな方が子どもの成長や進路に関わって頂いていることを知れてよかった。
- 今後何かと相談する機会があるが、相談する機関を知ること、相談する機関とつながることができてよかった。

<関係機関より>

- 直接、顔を合わせて本人や保護者さんの思いを聞くこと、そして今どんなことを考えているのか知ることができてよかった。
- 卒業後も継続的に相談できる場所があるという認識をもっといただく機会として必要な会議だと感じる。

今後も、地域と学校と家庭が連携し児童生徒のよりよい支援につなげていきたいと思います。

トピックス



みなさん、この花見たことありますか？



↓ ↓ ↓
裏面へ

きれいなピンク色の花ですね。

この花は、「タデ藍」という植物の花で、葉は布を藍色に染める原料となるものです。『藍染』という言葉聞いたことあるのではないのでしょうか。



新学習指導要領で示された学びの姿「主体的・対話的で深い学び」

「主体的な学び」→学習意欲や学習の振り返り、自己の目標設定を行う。

「対話的な学び」→仲間と協働しての問題解決や仲間の意見を聞いて考える。

「深い学び」→自ら考えたり表現したりする。

発達障がいのある子どもたちは、「目と手の協応」が苦手な場合があり、「目から取り入れた情報に対して、手を使って適切に処理する」ことが課題となります。自ら気づき、考え、行動する姿を目指すために、こんな活動はどうですか？

⇒ 藍を使った～叩き染め～



「主体的な学び」

- 毎日水やりをし、植物の成長過程を感じながら、その植物を生かして活動する。
- 作品づくりの際、「こんな作品をつくりたいな」と思いをはせる。
- 自分だけの作品をつくる楽しさを味わう。

★学習意欲や学習の振り返り、自己の目標設定を行う。

「対話的な学び」

- 葉っぱの色がつかない（友達や教師からの助言→叩き方の方法を知り改善する）。
- 手の平や指先で感触を確かめながら柔らかい葉っぱを収穫する（こっちの方が柔らかいかな・・・）。

★仲間と協働しての問題解決や仲間の意見を聞いて考える、また自分自身に問いかける。



「藍」はプランターを使って簡単に育てることが出来ます。栽培方法はインターネットにもたくさん掲載されていますので、参考にしてみてください。

「深い学び」

- 葉っぱだけを収穫する（「これは茎？葉？」）。
- 葉っぱがずれないように手で押さえながら葉っぱだけを叩く（目と手の協応）。
- 色の濃さは大丈夫だろうか。（「もう少し強くたたいた方が濃くなるかな・・・」）。

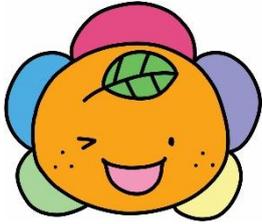
★自ら考えたり表現したりする。

プラス1

～いつもの支援を一工夫～



岐阜県立東濃特別支援学校
地域支援センター通信
No. 52 (R3. 9月号)



公開講座Ⅱ・Ⅲを開催しました。

8月3日(火)に名古屋短期大学 保育科教授 山下直樹先生に「コロナ禍における発達障がいのある子どものこころのケア」という演題でご講話をいただきました。

また、8月30日(月)には、愛知淑徳大学 非常勤講師 板倉寿明先生に「教室とくらしをつなぐ支援～コグトレ研修～」という演題でご講話をいただきました。

どちらもオンラインでの開催になりましたが、多くの先生方にご参加いただき、ありがとうございました。

どちらの公開講座もすぐに実践に活かすことのできるヒントをたくさん学ぶことができました。今後の児童生徒の指導支援に活かしていきたいです。研修のアンケートの結果(抜粋)を紹介したいと思います。



公開講座Ⅱ 「コロナ禍における発達障がいのある子どものこころのケア」 山下直樹先生

- このコロナ禍で子どもたちがどれだけストレスと闘って生きているか改めて考えることができました。今の自由のきかない状況を精一杯受け止めて生き抜こうとしている子どもたちに寄り添い、少しでもストレスを減らし、楽しく学校に通える環境を作りたいと思います。
- 喪失感が一つのキーワードという点が印象的でした。コロナ禍で、予期できないことが慢性的に続いており、児童生徒の気持ちを理解して支援することが大切だと感じました。

公開講座Ⅲ 「教室とくらしをつなぐ支援～コグトレ研修～」 板倉寿明先生

- 認知機能について曖昧だった点が、はっきりと繋がりました。コグトレやビジョントレーニング、体幹トレーニング等、継続的に取り入れていくことが大切だと感じました。
- 認知の力を付ける必要性を改めて感じました。いろいろな内容を組み合わせてトレーニングを行ってみたいと思いました。通常学級に在籍している児童にもコグトレを行いたいと思います。

当校の居住地校交流について紹介します

昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染防止のため「居住地校交流」も交流籍校の協力を得て、ICTを活用したオンラインでの実施となっています。画面越しにお互い緊張した様子でしたが、交流が進むにつれてそれぞれの活動を笑顔で楽しむことができました。今回は小学部・中学部で行っている「居住地校交流」の活動の様子をご紹介します。

小学部

小学部での交流は、精華小学校との交流の様子をお伝えします。当校の3・4・6年生の児童3人と精華小特別支援学級の児童との交流でした。「畑で野菜を育てている」という共通の学習から「野菜交流」をしました。さつまいも、オクラ、トマトとどのような野菜を育てているのか知ることができました。また、その野菜に関して「野菜クイズ」を出題する交流をしました。「それ知ってるー!」「オクラじゃなくてピーマンじゃない?」と様々な予想をして、楽しむ姿がありました。精華小学校のみなさんが、「にじ」の曲に手話をつけて歌ってくださり「知っている曲だ」と当校の児童が耳を傾ける姿も見られました。

クイズ

オクラをきったときのかたちは？

①



②



クイズ

さつまいものなかは なにいろ？

①

しろ

②

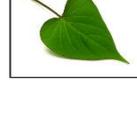


きいろ

クイズ

さつまいもの はっぱはどっち？

①



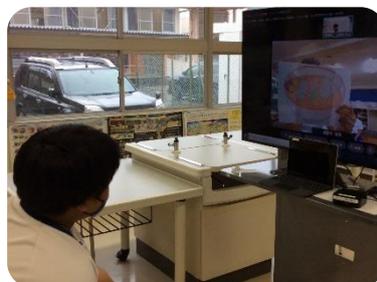
②



中学部

中学部では、「ラーメン交流」と題し、お互いが作成した「オリジナルラーメン」を発表し合う活動を行いました。自分の好きな具材をトッピングし、中には、麺に唐辛子やホウレン草を混ぜた「オリジナル麺」にまでこだわる生徒もいました。個性あふれるラーメンが勢ぞろいでとても楽しい活動になりました。

また、肢体・病弱クラスでは、交流籍校の生徒と一緒に教科の授業を行いました。出題された課題について相談し合いながら考え、意欲的に学習することができました。



今回使用した機器

端末：Microsoft SurfaceGO アプリ：Cisco Webex その他機器：大型テレビ、HDMI ケーブル